

[原著論文]

「心理演習」における箱庭制作と観察役のロールプレイ体験について

友納 艶花*

A study on experiences of creating a miniature garden and playing a role as an observer in the “psychology practice” class

Enka TOMONO*

Abstract

Although the significance of education through practices and drills has been gaining recognition over and above accumulating knowledge in undergraduate education for training licensed psychologists, very few studies concerning its effectiveness have been conducted. In this study, we examined psychological experiences and internal movements of the “psychology practice” class students through their experiences of creating an individual miniature garden and role-playing activity as observers. In the beginning of the production process, buildings were the student’s most common choice among other subjects of miniature gardens. As to internal movements, students were creating with their intuition and “tentatively trying” in the initial phase, then “broadened their images” in the middle phase, then came to “pondering and wondering” in the final phase of the creating process. While many students of the role of observer paid attention to “individuality” and “expression” of creators, that were observer’s clients, we found some of them have realized the difficulty of assisting the clients by observing as a psychological aid giver, and that enabled us to study the observer’s specific psychological experience process. The study suggests an agenda for organizing future class subjects by showing that the time limit of the miniature garden creation has an effect on the experience process.

KEY WORDS : psychology practice, creation of a miniature garden and the role of observer, role-playing, university students, psychological experience process

問題と目的

平成27年9月9日に公認心理師法が成立し、平成29年9月15日に施行され、人々の心の健康の保持増進に寄与することを目的としたわが国初の心理職の国家資格が誕生した。それに伴い、心理職への認知がより一層広まり、将来は人を支援できる公認心理師を目指したい大学生も増えつつあると言える。

公認心理師法の第2条に定めている公認心理師の業務として、①心理に関する支援を要する者の心理状態を観察し、その結果を分析すること、②心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと、③心理に関する支援を要する者の関係者に対し、その相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと、④心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うことと明記してある。そして、公認心理師の養成には大きく2つあり、学部における公認心理師となるために必要な科目を修めて卒業し、施行規則で定める認定施設でプログラムに則った2年以上（標準的には3年間）の実務経験を積むことにより受験資格が得られるが、主としては学部から大学院までの6年間の教育をもって行われ、学部における公認心理師となるために必要な科目は25科目とされている。

現在、臨床に関する国家資格を有する専門職（例えば、医師、看護師、言語聴覚士等）の教育においては、知識の教育に加えて実習・演習による教育がとても重要視され（田所，2019）¹⁾、公認心理師養成においても同様であると言える。川崎・小野（2021）²⁾によると、臨床心理学の実践において、これまで積み重ねてきた学びを運用できるようにならなければならず、そのための訓練は大学院教育や卒後教育で繰り返し行われてきている。つまり、これまでの心理学教育においての学部段階では座学が中心であったが、公認心理師養成における学部教育の中で実施される「心理演習」「心理実習」は、体験学習としてその意義は大きいと言える。その中で「心理演習」は、ロールプレイや事例検討等の体験学習を通じて公認心理師の専門的役割と技能を学習する点に主眼が置かれている科目であり、公認心理師養成におけるエビデンスの研究も今後益々必要であると思われる。

心理演習は体験学習としてロール（役割）を演ずるという模擬体験を通して、概念的にというより実感としてわかるということをねらいとした学習方法であるロールプレイを多く取り入れることで心理職を目指す

初学者にとっては不可欠な学びの過程である。春日（2020）³⁾は、ロールプレイは基本的な技術や物の考え方を身に付けていることが大変大事なことだけでなく、ほかにも初めて経験するような状況の中で自ら主体的に試行錯誤していく心理的感受性や洞察力を身に付けさせる指導も必要であると指摘している。言語を介した理知的な理解や操作よりも、実際に立ち回ることでの身振りや姿勢や目つき声色などの非言語的なコミュニケーションを重要な要素としている。非言語的心理療法の代表の一つである箱庭療法は河合隼雄により日本に導入され（河合，1969）⁴⁾、臨床事例研究が中心である。また、個別事例における効果や適性等に関する研究が多く、制作することでなぜ治療が展開するのかといった技法に焦点を当てた研究は少なく（平田，2018）⁵⁾、訓練教育に関する研究は課題となっていると言える。

そこで、大学生を対象とした訓練教育に関する研究の一つとして友納（2019）⁶⁾は、演習における箱庭療法を学ぶ学部生を対象とした演習方法としての研究の必要性を示した。そして、学部での心理援助の技法を学ぶ授業は受講生が多いことから1対1の演習の訓練が必要な箱庭療法の体験においてグループによる方法を導入し検討を行った。具体的には、62名の大人数受講生を対象にグループ箱庭の実施を行い、制作大学生の感想をもとに、女子大学生の1回のグループ箱庭体験でのミニチュア選択による内的体験要素を考察した。分析により、グループ箱庭体験が大学生にとって想像力を描きたてる楽しさをもたらすことや異なる世界観を共有できること、また協調性が生まれる体験ができるなど7つの内的体験要素が提示され、大学教育における心理援助の一つの訓練として得られる効果について考察を行った。他方、受講生の中には個別制作を求めているとの課題も残された。

川崎・小野（2021）²⁾は、心理演習などの体験学習がエビデンスに基づいて構成されるためには、心理演習において提供された体験学習の実態調査や体験学習が受講生にとってどのような体験になっているのか、どのような成長につながっているのかなど知見の集約が必要と述べている。また、心理演習科目は「公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について」に基づき学生15人につき一人の教員が担当することになっていることから、大人数授業では取り組みが困難だったが、少人数受講生でクラス構成ができるため1対1のロールプレイが可能となっている。

そこで、本研究では、友納（2019）⁶⁾の研究の続きとして、12人で構成される心理演習科目で行った箱庭個別制作と観察役のロールプレイ体験を通じて学生の心的体験での内的動きについて検討することを目的とする。心理演習における学生の内的体験過程を理解する一つの研究資料となることを期待される。

研究方法

1. 心理演習における箱庭制作の位置づけ

本学では2020年度より公認心理師養成のための学部カリキュラムを開設し、「心理演習」は「心理学的支援法」と「心理的アセスメント」などを受講した後の3年次前期開講科目となっている。厚生労働省と文部科学省から示され含まれる事項のうち、心理面接の知識及び技能の基本的な水準の修得を目的とし、非言語的心理面接の技法の一つとなる箱庭制作をシラバスに取り入れ、ロールプレイを通して、学生が制作者としてクライアントの模擬体験をし、観察役として心理援助者としての初期体験を得ることで感受性を高め、洞察力を身に付けることとしている。ロールプレイは内容、或はやり方によっては侵襲的になる危険をはらんでいる（川崎・小野，2021）²⁾ことから、箱庭制作は安心できる状況作り及び制作後の吟味とシェアリングをしっかりと行うことを考慮し、2コマでの授業構成で行った。

2. 本研究における箱庭制作参加者

公認心理師養成のための学部カリキュラムを受講する12人の女子大学生。全員が3年生で箱庭制作は初めてである。

3. 材料

砂が入っている箱庭（52×72×7cm）4台、ミニチュア、携帯カメラ、体験振り返りシート

4. 箱庭制作の手続き

授業は2回に分けて実施し、制作前には、オリエンテーションを行い、制作役と観察役の役割、訓練となる体験の意味、留意点について説明した。1回目はペアで制作役（クライアント役）と観察役（心理支援者体験役）を決めて、箱庭1台につき、一人が20分間の制作を行い、ペアが観察役を行った。制作者は、教員の指示に従い、砂に触れる体験、個別箱庭の自由制作、「過去・現在・未来の私」にぴったりと思うミニ

チュア選択、写真撮影の順で行った。その期間、観察役は制作者、つまり、クライアント役の動きを観察する。その後は役割交代を行った。2回目の授業では制作者と観察役体験に関する体験過程や気づきなどをグループに分けてシェアリングを行い、それぞれ発表を行った。研究においては、個人が特定されないように1回目の授業で行った個別制作及び観察役体験の振り返りシートについて分析を行った。

結果と考察

1. 箱庭制作過程における心的体験について

1) 砂に触れる体験

ロールプレイにおいて制作者の最初の導入体験として位置付けている。得られた振り返りシートから2つ以上の異なる内容を記述したものはそれぞれの記述として分類処理し、類似している記述を一つのまとまりとし、集計を行った。砂に触れる感触として、「サラサラ」が最も多く36%、「ざらざらして手につく」（22%）、「砂浜、海辺みたい」（17%）、「懐かしい」（7%）、「気持ちいい」「キラキラ」「なんでも作れそう」が各6%ずつであった。友納（2019）の研究に比べて「ざらざらして手につく」という触った後のべたべた感や爪に砂が入ることに対する抵抗をもつ学生が増えていることが伺えた。新型コロナウイルスが発生した時期に入学した学生であり、長い期間ものに触れたりする機会が激減した社会的環境の急激な変化から生じた心理的要因が考えられた。

2) 制作開始時に選ぶミニチュアの特徴

12人の学生の箱庭制作開始時に選んだミニチュアを上記1)と同様の分析方法を用いて検討を行った（Table1）。その結果、最初に選んだミニチュアは三重塔、お城、時計台、古い民家、お寺など10人が「建物」を選び、2人が「木」を選んだ。2番目に選んだミニチュアは、「木」が3人、「建物」が6人、「動物」が2人、「乗り物」が1人であった。そして、3番目に選んだミニチュアは「建物」が4人、「自然」が4人、「動物」が2人、「乗り物」1人、「木」1人であった。

山中（1999）⁷⁾によるとカルフは箱庭の治療のプロセスを作品の形としては、まず動物や植物が中心に出てくる動物植物的段階、次は、インディアンとカウボーイの戦いや戦車同士の戦いなど戦い・闘争的段階、そして、街とか平穏な作品が見られる適応の段階の3つに分けていた。ところが、本研究において箱庭制作開始時に学生が最も多く選んだミニチュアは「建物」

Table 1. 箱庭制作開始に選ぶミニチュアと理由

No.	最初		2番目		3番目	
	ミニチュア	理由	ミニチュア	理由	ミニチュア	理由
1	三重塔	お寺や神社が好きなので、和風の箱庭にしたいと思ったから	桜の木	きれいだと思ったから	線路	
2	お城	大きい物を探していて、一番目についてから	木	お城の後ろに置きたいと思ったから	動物(パンダ・キリン・ウシ)	木のそばに置こうと思ったから
3	大仏	インパクトが大きく、強く惹かれたから	カメ	家で飼っているカメに似ていてかわいかったから	池	カメに水を与えたかったから
4	病院	病院に馴染みがあるから	犬(3匹)	病院に敵意丸出しなものが欲しかった	家(4軒)	病院から離れた場所に住宅街を作りたいから
5	時計台	時計台を置くと、街の風景を表している感じが出るかなと考えたから	橋	川があると、街の風景を表している感じが出るかなと考えたから	家	理想の家族像を表現したかったから
6	鳥居	神社に行きたかった。厳島神社の雰囲気が好きだから	ヨット	色調を統一したくて、青と白の海のイメージに合うヨットを選んだ	ボート×2	ひとりでも何もないきれいな海の離れたとこに漕ぎ出してみたいから
7	桜の木(小)	砂がピンク色であったため、春らしい箱庭にしようと思った「春に桜」というイメージがあったため	桜の木(小)	桜の木が1本だけだと寂しいだろうという思いから	桜の木(小)	二本並べたところで、桜の木がある公園の箱庭を思いついた公園にある桜の木は、1~2本だけでなく、何十本が並んでいるようなイメージであったため
8	古い民家	一番最初に目についたから	お寺	最近言っていないと思ったから	滝	癒されたいから
9	お寺	千と千尋の神隠しに出てきそうで雰囲気があったから	鳥居	お寺系統で鳥居もいるかな	山	遠くに良い感じの景色があるように置けば、写真っぽくなるかな
10	赤・黄・オレンジの木、緑も	いろいろな色の木があったらかわいいと思ったから	家(洋風)	自然の中で暮らしてみたいと思っていたから	動物	生き物が大好きだから
11	家	自分が住みたい街をテーマにしていたため自分が住んでいると仮定した家が必要だと思ったから	交番	生活に必要な施設のミニチュアの中で、最初に目についたから	大きな木	自然が好きだから
12	神社	和風っぽい箱庭を作るのによいと思ったから	鳥居	神社の前に鳥居は必須と思ったから	滝	滝があると尚更和風っぽくなると思ったから

であり、次に「木」を選ぶ傾向が高いことが見られた。「人間」のミニチュアが制作開始時にはほとんど選ばれていないことが分かった。演習では、1回だけの制作体験ということもあり、理由で記述にあったように、好きなもの、インパクトのあるもの、出したい雰囲気があるものなどから和風と洋風に分かれた建物を置くことから箱庭制作が始まることが分かった。その後はかわいい子動物を加えながら穏やかな風景の箱庭作品

が仕上がり、先行研究で現れやすい戦い場面や怖い動物の出現はあまり登場せず、治療のプロセスと異なる平和的なミニチュアを選択する傾向が特徴的であった。3) 箱庭制作体験における内的動き

箱庭制作において内的体験は重要であり、平田(2018)⁵⁾は制作時の表現を通じた様々な体験を詳細に検討できる単回の分析を重要とした。そして、二人の被験者の制作過程と変遷における内的表現の動きを

事例として取り上げて検討しているが、本研究では、個別箱庭制作者12人の制作初期、中盤、終盤でのそれぞれの体験過程と制作全体を通して感じたことを振り返りシートを用いて内的動きを検討してみた。

まず、初期・中盤・終盤について検討した結果、初期においては「わくわく・ドキドキ」感から入る人が3人(A, C, E), 「悩む・迷う」から入る人が3人(B, G, K), 「作りたいと決めたイメージ」から入る人が2人(D, E), 「とりあえず」から入る人が4人(H, I, J, L)となり、「とりあえず」から制作始める学生が最も多かった。中盤になると、「作りたいイメージがわいてきて制作を行う」人が増えて5人(E, F, I, J, K)になり、「適当におく、目についたものを置く」が2人(B, D), 「置きなおし」が1人(A), 「悩む」

が1人(H), 「制作他者とのミニチュアの被りの心配」が1人(G)となっていた。終盤では、「箱庭全体をみながら埋める選択」(B, E, F, H, I, J, K)をする学生がほとんどで、「迷う・時間がなく焦りを感じる」が3人(A, C, F)であった。

次に、制作過程全体を通しての内的動きを検討した。分析方法は、振り返りシートから得られたデータについてKJ法(川喜田, 1986)⁸⁾を参考に分類した。具体的には、複数の感想につき、同じ記述、或は、類似していると判断される記述を一つのまとまりとした上で、反対に1つの感想に2つ以上の異なる内容を記述したものは2つのラベルに分けて処理・分類を行い、体験での内的動きとして以下のようなものが挙げられた(Table2)。

Table 2. 箱庭個別制作過程における内的動きの分類

中カテゴリ(回答%)	小カテゴリ一例
自分自身への気づき (44%)	何事も深く考えすぎる癖があるため、ミニチュアを置くのに時間がかかった/自分の普段の生活がミニチュアの選び方にもあらわれているように感じた/二つの世界を作っており、閉ざされた空間は私の価値観なのかなと思った/もともと人との距離に結構気を使うから、それが出ているのかなと思った/結構、現実よりも憧れとか夢とかのほうが好きなんだと思った/作っているうちに自分の感情や考えが整理されていくような気持ちになった/「私はこういう風に考えていたんだな」と、改めて理解・解釈することができて、面白いなと思ったなど
楽しさ・面白さ (15%)	たくさん想像力を働かせることができたように感じた/選んでいるうちに20分という時間があっという間に過ぎていた/置き方を工夫してみたり、向ける方向を意識したりなど思い通りになったときに気持ち良かった/短い時間で作った箱庭が自分らしさを発揮していて面白かった
選択への悩み (11%)	序盤は悩み続けた/たくさんの種類のミニチュアを前にすると、何をどのように置こうかと悩む時間が多かった/自分の好きなものばかりを詰め込むと、何をイメージして使ったのか分からなくなったなど
つくる難しさ (11%)	テーマを決めるのが難しく、大きなテーマで作ることができなかった/過去・現在・未来のミニチュアを選ぶ方が難しかった/想像しながら作るのが大変だと感じたなど
「正確さ」へのこだわり (7%)	動物や木をたくさん使ったが、ミニチュアの大きさに一貫性がないのが気になった/箱が思ったより大きく、縦に並んでいるときと箱庭に置いたときではミニチュアの大きさが違うなど
直感 (4%)	直感で選ぶことが多かった
焦り (4%)	15分間がすごく短く感じ、全体を通して焦ってしまった
分類不能 (4%)	途中で砂を掘って池を作ろうと思った

(1) 自分自身への気づき (44%)

何事も深く考えすぎる癖があるため、ミニチュアを置くのに時間がかかった／自分の普段の生活がミニチュアの選び方にもあらわれているように感じた／二つの世界を作っており、閉ざされた空間は私の価値観なのかなと思った／もともと人との距離に結構気を使うから、それが出ているのかなと思った／結構、現実よりも憧れとか夢とかのほうが好きなんだと思った／作っているうちに自分の感情や考えが整理されていくような気持ちになった／「私はこういう風に考えていたんだな」と、改めて理解・解釈することができて面白いなどから学生の自己理解が進み、多くの学生は「自分自身への気づき」が得られていることが窺えた。

(2) 楽しさ・面白さ (15%)

たくさん想像力を働かせることができたように感じた／選んでいるうちに20分という時間があったという間に過ぎていた／置き方を工夫してみたり、向ける方向を意識したりなど思い通りになったときに気持ちが良かった／短い時間で作った箱庭が自分らしさを発揮していて面白かったなどからイメージが広がり、心の世界を表現できる「楽しさ・面白さ」が考えられた。

(3) 選択への悩み (11%)

序盤は悩み続けた／たくさんの種類のミニチュアを前にすると、何をどのように置こうかと悩む時間が多かった／自分の好きなものばかりを詰め込むと、何をイメージして使ったのか分からなくなったなどから学生が箱庭制作過程で「悩む」心理的過程が生じることが窺えた。箱庭制作は「ただ置くだけ」と思いながら実際に品箱に立ってみるとなかなか思ったようにできない(久米, 2015)⁹⁾ 体験が得られたことが考えられた。

(4) つくる難しさ (11%)

テーマを決めるのが難しく、大きなテーマで作ることができなかつた／過去・現在・未来のミニチュアを選ぶ方が難しかった／想像しながら作るのが大変だと感じたなどから個別制作過程においては一人での作業ということもありつくる「難しさ」を感じていることが分かった。増田(1989)¹⁰⁾によると、人間は「つくる」ことを楽しむ遊び、「表現」の遊びができると述べているが、一部の学生においては、堅固と思われる自己と現実性を持っていることから箱庭制作を楽しむことより、難しさを体験していることが考えられた。

(5) 「正確さ」へのこだわり (7%)

動物や木をたくさん使ったが、ミニチュアの大きさに一貫性がないのが気になった／箱が思ったより大き

く、縦に並んでいるときと箱庭に置いたときとではミニチュアの大きさが違うなど、ミニチュアの大きさなど厳格性を求める学生の「正確さ」を求めるこだわりをもつ学生がいることが分かった。非日常的な意味があるイメージ体験より、箱庭の用具への関心が示された。

(6) 直感 (4%)

上述(3)(4)のような意識的に作ろうと思っている学生に対して、直感で選んだという答えた学生もいた。

(7) 焦り (4%)

時間がすごく短く感じ、全体を通して焦ってしまったという振り返りから、制作過程において「焦り」の気持ちが強かったことが分かった。

(8) 分類不能 (4%)

途中で砂を掘って池を作ろうと思ったの項目から分類不能とした。

4) 過去・現在・未来のミニチュア選択の特徴

本研究では、心理演習の授業という制限と制作における時間的制限を設けている中、学生のより深い内的体験を促すため、「過去・現在・未来の私」にぴったりと思うミニチュア選択を行う時間を設けた。以下、それぞれが選んだミニチュアとその理由について12人の内容を取り上げて得られた特徴を検討してみた。

過去のミニチュアとして選択されたのは、小さく座っている子猫(No1)、頼って生きていたアヒルが連れている真ん中の鳥(No2)、自信がなくとがっていたことから小さな木(No7)、いつも誰かに助けられていた黄色いひよこ(No8)、自分の世界に入っていたからメンヘルっぽい建物(No10)、狭い視野の中で生きていたからカメ(No11)など制作者自身の過去の自己像が多く投影されていることが窺えた。

現在のミニチュアとして選択されたのは、粗さが目立ってきたから野蛮人(No3)、曲がったことをみると苛立ってしまうビル(No5)、将来どう進めばよいか迷うことから黄色い小さな木(No7)、人生を真剣に考えることから土偶(No8)、挑戦している自分っぽいから滝(No10)など多くの学生が「過去」より成長し、真剣に考えながら迷いながら進めている自己像が投影されているミニチュアを選択していることがわかった。

未来のミニチュアの選択では、心を大きくし皆を見守れる人になりたい、自信があり芯のある人間になりたいなどを象徴する大きな木(No2, No5, No7, No8)が多く選択され、過去と現在からポジティブな

未来像を意識していることが推測された。他方、歳を取ると歩くのが遅くなるカメ (No1) や世間体を気にして縛られた人 (No3) のような将来の不安像が投影されていることも窺えた。

研究においては、学生が観察役体験を通して、どのような内的動きと気づきを得たのかを検討するため、振り返りシートから得られたデータに基づいて制作体験過程と同様の方法で分析し、体験での内的動きとして以下のようなものが挙げられた (Table3)。

2. 観察役体験における内的動きについて

Table 3. 観察役体験における内的動きの分類

中カテゴリー(回答%)	小カテゴリー例
制作者の個性 (22%)	自分では思いつかないような配置でミニチュアを置いていて個性が出るなと思った／現実的に作ったり、空想を作ったり、人の個性が出るなと思った／それぞれ個性が出ている作品が多く、並べ方にも差が見られた／個性的な作品だと思った／それぞれ人の個性が出ていて面白いと感じた／元々、作成者を知っていたからか、作成者らしさがものすごく出ていると感じた／皆くせが強いなど
制作者の箱庭の表現 (21%)	砂をただの土台としてしか見ていない人もいれば、砂を使って海などを表現している人もおり、砂の使い方について全く違う考え方をしている／日常ではあんまり体験しないような(動物と散歩など)箱庭を作っている人もいれば、日常的な(公園・町並みなど)箱庭を作っている人がいた／異なる点は、「弱肉強食がある自然」か「のどかな自然」で、同じ自然でも二人が思い描く自然は全く違うことが分かり、大変興味深いなど
制作時の動き (18%)	たくさん悩む人もいれば、決断が早い者もいて、多種多様であった／動きが比較的スムーズであったことから、考え込まず、のびのびと自分の箱庭を作成している人が多かった／ミニチュアをどれにするか選んで、置くまでの時間がどんどん短くなっていった／初めにミニチュアを選ぶときに全員が近くのミニチュアを選んでいたので気がなったなど
観察者としてのふるまい (12%)	どうしたら相手が作業しやすい立ち振る舞いというか、雰囲気のできるか、距離や姿勢を試行錯誤していた／座って観察ではないから、立ったままで姿勢によっては圧迫してしまわないかと考えた／クライアントの後ろから観察していたが、隣の観察室から見ていると観察しづらかったらと思う／クライアントに観察していることを意識させないようにするのは難しいと思ったなど
制作過程の意味 (12%)	同じものを複数個かためて置いていることにも、何か意味があるのかもしれない／どのような意味を持って置いているのか興味がある／私が観察していた人は、古風なミニチュアばかりを使っていたので、日本ぽいものが安心するのかなと思った／箱庭の観察では、できた箱庭だけでなく、箱庭を作る過程が大切であることが分かったなど
制作時の構想 (12%)	ミニチュアを手にとってから構想を練る人と、ミニチュアを取る前に構想を練る人に分かれているような気がした／最初にテーマを決めてから作ったり、目についたミニチュアを取り入れてから構想を考えたりしている人がいた／なんとなくで作り始める人よりも、イメージしてテーマが初めからあって作り始める人のほうが多いと感じたなど
その他分類不能 (3%)	全く知らない人のものを初見で見ても、大体こういう人なのかなという予想はつくなど感じた

1) 制作者の個性 (22%)

自分じゃ思いつかないような配置でミニチュアを置いていて個性が出るなと思った／現実的に作ったり、空想を作ったり、人の個性が出るなと思った／それぞれ個性が出ている作品が多く、並べ方にも差が見られた／個人的な作品だと思った／それぞれ人の個性が出ていて面白いと感じた／元々、作成者を知っていたからか、作成者らしさがものすごく出ているなと感じた／皆くせが強いなどから「制作者の個性」に注目している動きが窺えた。

2) 制作者の箱庭の表現 (21%)

砂をただの土台としてしか見ていない人もいれば、砂を使って海などを表現している人もおり、砂の使い方について全く違う考え方をしている／日常ではあんまり体験しないような（動物と散歩など）箱庭を作っている人もいれば、日常的な（公園・町並みなど）箱庭を作っている人がいた／異なる点は、「弱肉強食がある自然」か「のどかな自然」で、同じ自然でも二人が思い描く自然は全く違うことが分かり、大変興味深い／最初に真ん中にミニチュアを置き、すべて正面を向いていたので、自分の作りたいイメージや軸がしっかりとある／砂をよけて水を作るという行為だけでも人それぞれのやり方があり、様々な川ができていたので、見ていて興味深かった／二人を観察したが、共通点として「自然なもの」を多く取り入れていることが挙げられた／お化けや不思議な形の魚なども置いていたので、興味深かったなどから観察者は「制作者の箱庭の表現」について重点的にみていることが窺えた。

3) 制作時の動き (18%)

悩む人もいれば、決断が早い者もいて、多種多様／動きが比較的スムーズであったことから、考え込まず、のびのびと自分の箱庭を作成している人が多かった／ミニチュアをどれにするか選んで、置くまでの時間がどんどん短くなっていった／初めにミニチュアを選ぶときに全員が近くのミニチュアを選んでいたので気がなった／最初に荷物等の自然のものを選ぶ人が多いという印象を受けた／始めに砂を触っている様子を見たときに、手のひらを砂につける人や指先で触る人などがいて、人それぞれの違いを感じていることから観察者は「制作時の動き」に注目していることが窺えた。

4) 観察者としてのふるまい (12%)

どうしたら相手が作業しやすい立ち振る舞いというか、雰囲気のできるか、距離や姿勢を試行錯誤していた／座って観察ではないから、立ったままだと姿勢によっては圧迫してしまわないかと考えた／クライエン

トの後ろから観察していたが、隣の観察室から見ていたら観察しづらかっただろうなと思った／クライエントに観察していることを意識させないようにするのは難しいと思ったなど、「観察者としてのふるまい」について内省していることが窺えた。

5) 制作過程の意味 (12%)

同じものを複数個かためて置いていることにも、何か意味があるのかもしれない／どのような意味を持って置いているのか興味がある／私が観察していた人は、古風なミニチュアばかりを使っていたので、日本的なものが安心するのかなと思った／箱庭の観察では、できた箱庭だけでなく、箱庭を作る過程が大切であることが分かったなどから観察役は箱庭の「制作過程の意味」についてより関心を示していることが窺えた。

6) 制作時の構想 (12%)

ミニチュアを手にとってから構想を練る人と、ミニチュアを取る前に構想を練る人に分かれているような気がした／最初にテーマを決めてから作ったり、目についたミニチュアを取り入れてから構想を巡らせている人がいた／なんとなく作り始める人よりも、イメージしてテーマが初めからあって作り始める人のほうが多いと感じた／最初は、川の形をどうするか悩んでいたけど、だんだんイメージが湧いてきたのか、ミニチュアをたくさん使用していたなどから、観察者は箱庭制作者の「制作時の構想」について注目していることが窺えた。

7) その他分類不能 (3%)

また、全く知らない人のものを初めて見ても、大体こういう人なのかなという予想はつくなと感じるといふ分類が難しい項目として見られた。

まとめと今後の課題

本研究では、公認心理師養成のために必要な心理演習科目で行った箱庭個別制作と観察役のロールプレイ体験を通じて学生の心的体験での内的動きについて検討した。箱庭制作の体験過程においては、自分自身への気づき、楽しさ・面白さ、選択への悩み、つくる難しさ、ミニチュアの「正確さ」へのこだわりなど様々な心的過程が見られた。また、それは意識的につくろうとする内的動きがあれば、箱庭制作を無邪気に楽しんだり、或は制作より箱庭のアイテムに関心を持っているなどそれぞれが異なる体験をしていることが考えられた。自分自身への気づきが最も多かったことから制作を通して自己の内面のあり様や気づきを得ること

が演習を通して得られていることが考えられた。

次に、演習では理論的説明を行わずに観察者（心理援助者役）として行う役割でどのような内的動きがみられるのかを検討した。傍で制作者をそっと見守りながら、制作者の個性、表現や制作者の動きに注目するという心理援助者役を演じる中で、制作者（クライエント役）が箱庭を置く様子を「観察」する動きが最も多く見られた。また、観察者としてのふるまいについて吟味するなど箱庭療法における援助者側の見守ることへの難しさについても体験できたと言える。他方、日常の人間関係が現れ、心理演習におけるロールプレイは知合い学生同士であることや時間制限による焦りが見られたことから、今後の授業設計の工夫が課題として残された。

Received date 2022年7月19日

Accepted date 2022年7月19日

引用文献

- 1) 田所撰寿 (2019). 学部学生に対するカウンセラートレーニングに関する授業内容—ロールプレイを中心としたシラバスの分析から— 作新学院大学論集, 9, 23-36.
- 2) 川崎 隆・小野貴美子 (2021). 「心理演習」を受講した学生の成長—公認心理師の役割演技を通じて得た気づきと変化— 別府大学紀要, 62, 43-57.
- 3) 春日作太郎 (2020). 教育実習の事後指導におけるロールプレイが及ぼす効果の検討—サイコドラマ的指導による事例研究— 都留文科大学大学院紀要, 24, 135-154.
- 4) 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門 誠信書房
- 5) 平田 平 (2018). 箱庭制作過程の変遷における内的表現の働きの検討—内的体験に差異の見られた二事例の比較— 明治大学文学研究論集, 49, 123-143.
- 6) 友納艶花 (2019). グループ箱庭とミニチュア選択による内的体験要素 九州女子大学紀要, 55 (2), 85-94.
- 7) 山中康裕 (1999). 新版・カルフ箱庭療法 誠信書房
- 8) 川喜田二郎 (1986). KJ 法—混沌をして語らしめる— 中央公論社
- 9) 久米禎子 (2015). 心理面接の基礎訓練としての箱庭体験グループ 鳴門教育大学研究紀要, 30, 255-265.
- 10) 増田靖弘 (1989). つくる 増田靖弘 (編集代表) 遊びの大事典 東京書籍 pp.869-922.